

# TOKYO美人と、東京1000ストーリー

## 心は翼 連載④

(012 千鳥が淵)

穂高健一

3月下旬の月曜日だった。首都高からみた、公園や堤の桜は満開だった。とくに『千鳥が淵』の周辺の桜は見事に咲いていた。甲府盆地までくると、白雪を被った八ヶ岳連峰が視界に入ってきた。

井伊佳元の車が、ピラタス蓼科ロープウェイの880台が収容できる、大きな無料駐車場に着いた。

防寒着を着込んだ井伊は、小さなアタクザックとピッケルだけを持った。冬山の重装備はひとまず後部座席に置いたまま、ロープウェイのチケット売場にむかっ



た。

待合所にはスノーボーダーの若者、中高年のスキーヤー、登山者、アジア系の観光客などがグループを作り、始発9時の出札を待つ光景があった。

かれはそのなかに加わった。そして、乗り込んだ。発車ベルが鳴った。全身がしずかに持ち上がる。山頂駅(標高2240m)に眺かかっていくほどに、幻想的な樹氷と霧氷の世界が広がってきた。

眼下は樹氷林の間を縫う、約4キロのダイナミックな長いコースだった。眼下のシールが複数の曲線で描かれていた。上級者スキーヤーやスノーボーダーたちが、山頂駅から4キロの樹氷の間を滑り降りてくる。カラフルなウェアだから、より目立つ。技量の高いスキーヤーが多いようだ。

遠景の北アルプス、南アルプスの白い連峰がだんだん浮かび上がる。窓からのぞき込む観光客が、

「すごい。見てみて」

としきりに驚嘆のことはを発していた。

山頂駅に到着すると、女性の観光客が争うようにトイレに向かった。

それを横目でみた井伊は、建物の外に出ていった。雪面をなで



てくる北風が、小波さざなみのように粉雪こなゆきを舞い上げる。防寒服を着ているが、いまだ身体が寒さになれきれず、芯までも凍結するような体感温度たいかんおんどだった。

周辺は溶岩台地よつがんだいぢで、『坪庭つぼにわ』と呼ばれている。青い空の下で、一面が平坦な白銀の世界だった。そこは観光客も入れる回遊探勝路かいゆうたんしょうろになっている。

観光客が雪面で滑って転ぶと、それがにぎやかな笑いになっていた。

井伊は20年前の誘拐事件を考えた。

「6歳の少女が、このピラタス蓼科スキー場から本沢ロッジまでどのように連れて行かれたのか？ 奇怪な事件だ」

主稜じゅうりょうの縦走路じゅうそうろとなると、

縞枯山しまかれやま、茶白山ちやうはくやま、丸山、中山、天狗岳てんぐたけ、あるいは硫黄岳まで、けわしい峰々を越えていく必要がある。はたして可能だろうか？

井伊はひとつの推理を展開してみた。少女・佐和子は父親のスキーの滑降かこうをみるために、家族3人で山頂駅さんていえきにきた。……学生時代にスキー部員だった父親は、山頂駅に到着すると、娘を母親に任せて、すぐさまスキーに興じた。

事件の発端はつたんとなった、母親が駆け込んだトイレは、山麓さんろくのホ



テルでなく、この山頂駅ではないだろうか。母親がトイレに行った、わずかな空白時間に、何者かが少女を誘拐した可能性がある？

蓼科の現地にきてみると、誘拐事件の犯行の全容はつかめないが、犯人の行動の一端がこのように推量すいりょうできた。

トイレから出てきた母親は、6歳の娘がいなことに気づいた。建物から出て、坪庭を探してみるが、娘の姿はどこにも見当たらなかった。気が気でなかった。

(佐和子は父親のスキーを見たくて、ひとりで勝手に改札をくぐり、ロープウェイに乗ったのではないか？)

母親はロープウェイで山麓駅まで降りてみた。どこにも見当たらない。駅員にも聞いてみるが、いい情報は得られなかった。母親はだんだん落ち着きをなくしてきた。スキーに興じる夫がやがて山麓まで降りてきた。

(佐和子がいなくなったの)

これら事情を説明すると、父親の顔がとたんに曇った。

ふたりは不安と焦燥せうそうに駆り立てられながら、もう一度、山頂駅に向かった。回遊探勝路の坪庭などを躍起やくきになって探しまわる。

どこにも、佐和子の姿は見つからない。大声で、わが子の名を呼ぶ。虚しい木霊こだましか返ってこない。

(佐和子になにかあったら、どうするんだ。おまえが目を離すからだ)

父親の感情が高ぶり、苛立つ。母親は沈うつな表情で、

(佐和子ならば、一人でホテルまで帰れるわ。6歳だけど、しっかりした娘だから)

と、そこに期待をつないだ。しかし、ホテルにも娘の姿はなかった。

(警察の手を借りよう)

両親は公衆電話で、110番しただろう。

少女が消えてから、この段階まで、2時間は経っていただろう。警察や地元消防団、山岳関係者が捜索隊を組み、現地にくり出す。そこまではさらに時間を必要とする。

六歳の少女を誘拐した犯人は、すでに縞枯山を越えている。少なくとも、山頂駅付近の視野から完全に消えていたはずだ。

井伊はここに大きな疑問をおぼえた。

ベテラン登山者でも、ロープウェイから本沢ロッジまで、<sup>冬場</sup>となると、最短でも2日間を要するコースだ。天候が悪く、降雪だつたりすると、さらなる日数がかかる。天候が良くても、6歳の足では山岳の深雪などとても歩けない。

冬山登山は重装備だ。犯人が頑強な登山者だつたと仮定しても、荷物にプラスして、17キロ前後の少女を背負うとは考えにくい。他方で、少女はおとなしくザックに詰め込まれないだろう。(少女はなぜおとなしく従ったのか?)



井伊はピッケルを抱え込み、腕組みして考えた。

誘拐犯が主稜ルートを使ったとすれば、単独犯ではムリだ。複数犯ならば、不可能ではない。しかし、社会人にしろ、学生にしろ、山岳パーティーが思いつきで、少女を誘拐して、本沢ロッジまで連れて行く、とは考えにくい。複数犯ならば、どこかで情報が洩れ、完全犯罪にはならないだろう。

この犯行は単独犯だ、偶然の連続で完全犯罪になったのだ。

井伊はそう推理した。

「ちよっと、お伺いします。スキーを履いて、山の斜面を登れるのはなぜです? どうして後ろに滑ってこないんです?」

50代初めの女性がふしぎそうな顔で話しかけてきた。厚手のコートをきた観光客だった。

女性の視線の方角をみた。カントリースキーを楽しむ5、6人のグループが縞枯山の緩斜面をのぼっていく光景があった。これらのウェアは原色だけに、一人ひとりの動きがよくわかった。「板の裏にシールをつけているから、バックはしない。前にしか進まない」

カントリースキーの場合は、板の幅が5、6センチと細く、軽い。アルペンスキーのような金属エッジがつかないのが特徴だ。だから、シールがつけやすい、と簡略に教えた。

「シールって?」

「雪の上で暮らす、動物の毛皮からできている。アザラシは雪の斜面を前に進むが、後ろに滑り落ちない。雪上に生息する動物

の毛をシールに使えば最適。ただ、ワシントン条約に違反しない動物が条件だけだ」

「そうなの。だから、スキーを履いても、動物のように山のなかを登れるのね。冬山の登山者はみなスキーを持って登るの？」

女性は好奇心のつよい目を向けてきた。

「けわしい雪山や氷壁をのぼる登山者は、スキー板は長くて邪魔になる。だから、使わない。登山靴の底につける楕円形の『ワカン』とか『スノーシュー』は使うけど……」

その理解が及ばないらしく、女性は一言礼をいってから、観光客の集団に溶け込んだ。

「この事件は解決できるのか？ 20年前には、プロの警察が誘拐事件を遭難事故と見誤っているのだ。そのうえ、完全犯罪にさせてしまったのだから、途轍もなく難事件だ」

自分には組織力はない。情報源すら、6歳児だった佐和子の記憶だけだ。物証の「つも」もなければ、事実確認ができる科学的なデータすらない。一匹狼の裏稼業人が、難解な誘拐事件の真犯人を突きとめられるのか。

「決して、あきらめないぞ」

粘りつよい精神力が唯一の武器だ、とかれは自分自身に言い聞かせていた。他方で、本ものの現職刑事が束になっても、かなり難解な事件だろうと思った。

井伊の頭脳が推理にもどった。……ピラタス蓼科スキー場から、本沢ロッジまで、少女は強引に連れていかれた。

このルートは凍傷とか、墜落とか、雪崩とか、生と死が紙一重だ。随所で危険にさらされ続ける。その恐怖は地獄に近い。

雪氷の山岳に入り込んだら、自然そのものが凶器だ。

「なぜ？ 犯人は肉切り包丁で、少女を脅す必要があった？」

本沢ロッジは主稜からやや下った高所だ。標高は224

0メートルもある。山小屋の部屋は無施設だったにしろ、少女は積雪が約3メートルもある山の中を逃げ出せない。積雪そのものが監禁した獄の塀と同じだから。

犯人が刃物で少女を脅しつづけたのは、解放された後の恐怖心を植え付けるためだったのか。

『これから親もとに帰してやる。おれのことをしゃべれば殺すぞ。いつでも殺せるんだぞ』

あるいは何かをカムフラージュするために、刃物を突きつけたのか。

井伊は腕時計を見た。冒険スキーヤーの山崎勉は10時になっても現れなかった。20年前の少女誘拐事件とのからみで、あの男にも探りを入れたかっただけに、井伊は失望した。

（口達者なものは、とかく実行力がともなわないものだ。冒険スキーもあやしいものだ。入院は、二階の階段から転がり落ちて、



骨折したくらいだろう」

退院祝いだといいい、東京見物かもしれない。八ヶ岳の山稜の雪は見なれているが、皇居周辺の桜は別格だ、いいチャンスだ、と思っっているに違いない。となると、いまごろは千鳥が淵の花見だろう。そんな性格の人間だ。

井伊は坪庭を通って縞枯山荘まで往つてみた。十数人がクロスカントリーの講習会を受けていた。一瞥しただけで、かれはふたたび山頂駅に復つてきた。



ロープウェイがしずかに到着していた。ドアが開くと、大勢がいちどに出てきた。そのなかに、スキー板を担いだ山崎がいた。視線があうと、浅黒い顔の山崎が白い歯を見せた。

「本当に、スーパの店長が見物にきている。新宿のスポーツ店で、名刺をもらい、すこし話したただだから、半信半疑だった」  
山崎はことのほか喜んでた。

「はじめから疑っていたわけだ。本沢ロッジまで、一緒できると、こつちは約束の時間通り、楽しみにきましたよ」

「ずいぶん待たしたけど、きょうはリスクのあるスキーはしない。退院後の初すべりだから、いきなり過激なこととはできない。ゲレ

ンデで、かるく滑るていど。明朝からは2日間かけて本沢ロッジまで主峰縦走だが……、ところで、いい加減さんの登山道具はどこに？」

山崎の目が周囲をまわっていた。

「山崎さんが来るかどうか、半信半疑だった。いま東京は、千鳥が淵の桜などが満開だ。花見かもしれないと、疑っていた。だから、テントなどは駐車場の車に置いてきた」

「たがいに、半信半疑、信じていなかった者どうしだ」

山崎が大声で笑った。

「あなたはメディアに顔が広そうだ。地元の記事を紹介してくれませんか。できれば、20年前に現役で活躍していた、ジャーナリストがいい」

「……20年前の現役か、だれがいいのかな？ 『毎朝長野新聞』の芦野守さんあたりかな。もう定年退職してから、4、5年経っているから、年齢的にも、ちょうど合うし。ところで、ジャーナリストに、なにが訊きたいの？」

山崎がこちらの意図を知りたがる目を向けた。

「20年前に起きた、ある事件を調べている」

山崎の反応を見逃さないように、井伊は凝視していた。この男が誘拐事件にからむならば、なにかしら動揺や反応があるはずだ、と。

「芦野守さんは社会部のデスクや部長までやったひとだから、ふるい事件を訊くなら、ちようどいい。ところで、どんな事件？」

「この蓼科ロープウェイで起きた、年前の少女誘拐事件について」

「ここで、そんな事件があったの。犯人は？」

山崎はとぼけているのか。

「未解決のままだった。芦野さんに電話を一本入れてくれると、ありがたいけど」

「電話番号とか、住所とかは判らないな。新聞記者はむかしらから、個人情報教えない人種だから」

「教えたくないのか、ほんとうに判らないのか。井伊は、山崎の顔の表情から、真意を推し量っていた。」

「何か、コンタクトを取る方法はないのかな？」

「新聞社に訊いても、いくら山崎勉でも、教えてくれないだろうな。そういえば、芦野さんはもうすぐ定年だ、そのために清里に近い『鯉のぼりの里』に、家か、畑か、なにか買ったと話していたな」

「じゃあ、これから『鯉のぼりの里』にいったらどう？」

「硫黄岳の冒険スキーは観にこないの？」

山崎の顔には期待外れの表情が浮かんだ。

「もちろん、冒険スキーは観させてもらおうし、そのつもりで来たわけだし。ただ、清里までいったら、ワザワザ蓼科にもどってこなくて、松原湖のほうから、本沢ロッジに登ったほうが楽で早い。ローカルTV局のクルーとおなじルートで現地に入るから、本沢ロッジで合流したい。こっちは縦走の2日間が節約できる」

「節約？ 雪山の縦走が目的じゃなかったの？ 名前の通り、ちよつといい加減な気持ちの山登りだな」

「冒険スキーの見学が唯一、最大の目的。山は逃げないけれど、山崎さんのスキーはいつ見られるかわからないから、楽しみですよ。日数が節約できた分、稲子リゾート温泉のペンションに立ち寄ってみたい。マラソランナーはお茶をのまないが、登山者はビールのひとつも飲む」

「それはぜひぜひ。冬場の一元の客は、女房が喜ぶ。彼女は産湯を使ったときから、稲子湯の人間だ。八ヶ岳伝説でも、蟻の通り道でも、古い事件でも、なんでもよく知っている。まあ、おしゃべりな人間だ」

「冒険スキーヤーは自分のことを棚にあげていた。そして、山頂駅からスキーで飛びだした。」

井伊の乗用車が蓼科から、山麓の交通量の少ない、閑散とした道路を飛ばして、清里に近い『こいのぼりの里』までやってきた。

農家の前で、鶏に餌をやる婦人に、「元毎朝長野の芦野守さんの家は？」といつただけで、懇切丁寧に住居までの道順を教えてくれた。古風な構えの一軒家だった。庭にはゆつたりして梅が咲く。



首都高からみた、千鳥が淵の桜は満開だ。東京との季節のちがいが感じられた。

玄関の呼び鈴を押すと、夫人が出てきた。来意を告げると、取り次いでくれた。上がり框かまちに現れた芦野守は白髪で、細身だった。

井伊は名刺を差し出し、紹介者の山崎勉の名まえを出してから、「20年前に起きた、6歳の少女誘拐事件を追っているんです。事件の発生場所は蓼科ロープウェイ……」

井伊は情報提供をもとめた。

「記憶にないな、6歳の誘拐事件は……。犯行の場所は蓼科？」それは追い払う態度でなく、多少のところ協力しようという姿勢に思えた。

「少女の足取りは山頂駅まで。その先がわかっていないんです」井伊は情報を細切れに出しながら、芦野がどんな人物で、どんな性格かと、さぐりをいれていた。

「あれは昭和何年だったかな？」

芦野が腕組み、記憶の一つをさかのぼりはじめていた。井伊は無言で、次のことばを待った。

「あの少女は何歳だったかな。幼い子が坪庭ひらにわに迷い込み、3日間ほど、警察や消防や山岳関係者が山頂駅やまねの一带を探した。結果的には遺体も見つからなかった。そんな遭難事故なら、あったな」

「その事故の月日とか、経緯けいゐとかを教えてくださいませんか」  
「まあ、書斎しゆさいのほうへどうぞ」

一階の部屋に通された。書斎は和室で、陽の当る縁側えんがわでは猫が寝そべっている。細君がお茶を運んできてくれた。

芦野はとなりあう板張りの部屋の書庫しよこから、年代別に整理された手帳とか、記事のスクラップとかを取りだし、和室の黒漆のテーブルにのせていた。几帳きちょうめんな性格らしい。メガネをかけてから、資料をめくりはじめた。

「この遭難事故じょうなんじこがそうだ。子どもから目を離れた母親への批判記事だったから、実名報道は避けています。20年まえじゃないな、21年まえだ」

芦野がスクラップの記事を指す。

3月15日午後2時ごろ、北八ヶ岳のロープウェイ山頂駅で、娘(5)がいなくなった、と大蔵省勤務の男性(35)が地元警察に届け出た。

家族は父親と母親と少女の3人

で、一昨日からスキーを楽しむために当地に来ていた。母と娘は、父親の滑降をロープウェイから見ると、午前10時過ぎに山頂駅に着いた。母親がわずかに目を離れたときに消えた。少女はスキーウェアを着ているが、食料などは携帯していない。

積雪は約25メートル。天候は曇りで、風も弱く、視界も良好だった。付近には大きな雪崩の発生はなかった。警察はヘリと地上の両方から、搜索を開始した。



「坪庭は平坦地だが、冬場は大人でも迷いやすい。一度方向を見失うと、山頂駅に帰れなくなる。過去にはいくつも遭難の事例がある。親は目を離さないでほしい」と近くの山小屋関係者は話す。夕方から雪が降り、視界がなくなつたので、捜索はいったん打ち切られた。

「父親は大蔵省勤務か、これに近いな。この5歳の娘の実名がわかれば、教えていただけますか」

「古い事故だ。亡くってから、ずいぶん年数が経つし、個人情報 の点でも問題なからう。少女の名まえは鳴野佐和子、5歳」

「間違いない。1歳違うが、彼女だ」

井伊は、ついに一つの手がかりがつかめたと、心が高揚する 自分を知った。

（誘拐の犯行時間は3月15日午後2時ごろ。日時と場所が特定 できた。アリバイ崩しにも使える。きょうの収穫は大きい）

これは犯人を追う有力な武器だ。完全犯罪の扉をこじ開け る突破口だ、悪魔の追撃ができる、と井伊は一段と燃える自分 を知った。

「少女の捜索は3日間だった。雪解けのあと、もういちど捜索が 出されたようだが、遺体はとうとう発見できなかった」

芦野がなおも取材ノートをみながら、気の毒な口調でいった。 「この少女は本沢ロッジで発見されています。いまは26歳で、

詩人です」

「えっ、本沢ロッジだって。そんなバ カな」

芦野が絶句した。

井伊佳元の運転する車が、鯉のぼりの里から、清里、野辺山、松原湖の 角にむかった。車窓の右手には、小海線の二両編成の列車が、早春の高原を登 っている。日本一高いところを走る路 線だ。反対側には、八ヶ岳の最高峰の 赤岳がそびえる。威厳にみちた鋭峰だった。

「犯人は5歳の少女を連れて、八ヶ岳の雪峰をどのように越え たのか？ 誘拐事件の最大の謎だ」

井伊がつぶやいた。かれが向かう先は、松原湖に近い稲子リゾ ート温泉だった。そこには冒険スキーヤーのペンションがあり、 細君は地元のことをよく知るといふ。新たな情報に 出会えるかもしれない。元ジャーナリストの芦野守から 鳴野佐和子の新情報が 得られたように。

少女誘拐事件から20余年が経つ。細い糸でも、わずかな手がかりでも、ささいな情報でも大切に する。丹念に手繰り寄せれば、 完全犯罪のどこかに穴が開くはずだ。そこから次の展開が開ける。 誘拐犯に近づける、道が開ける。かれはそう自分に言い聞かせて いた。





井伊は、鯉のぼりの里で、『毎朝長野』の元記者の芦野守から  
みせてもらった新聞記事、取材ノートの内容をあらためて検証  
してみた。……ピラタス蓼科ロープウェイ山頂駅に近い「坪庭」  
から、5歳の少女が消えた。警察は山岳遭難あつかいだった。鳴  
野佐和子の記憶は、誘拐事件で、当時6歳だ。

同姓同名の被害者が一年ちがいで、おなじ場所で、事件、ある  
いは事故に巻き込まれたりするものなのか。鳴野佐和子がまった  
く別人だとすれば、フアンタジーなミステリーだ。悪魔がどこか  
で少女をすり替えた、という奇異な展開になってしまおう。

『鳴野』という苗字はめずらしい。ここは深読みをせず、同一  
の少女だと確信を持つべきだろう。

鳴野佐和子は26歳まで生きている。この事実からしても、少  
女が巻き込まれたのは山岳遭難事故でなく、誘拐事件だ。これは  
間違いない。

井伊は頭のなかで、誘拐事件の筋道を立ててみた。完全犯罪  
の場合は、犯人すら意図としなかった、偶発、偶然の連続で起  
こるといふ。裏を返せば、狙っても完全犯罪はまず成功しない。  
完全犯罪は、偶然から発生した事件ならば、犯行の動機からの  
説明はむずかしい。いまは容疑者すら判明していないのだから、  
なおさらである。

ここは5歳の佐和子の身柄引渡しから、推察すべきだろう。  
いつ、どこで、どのようにおこなわれたのか。それが事件説明の  
ポイントのひとつだ。誘拐犯と佐和子の親との間で、なんらかの

取引がおこなわれた、とみたほうがよいだろう。

井伊は車を運転しながらも、身柄の引渡しを推理してみた。…  
：犯人から電話があったとすれば、事件発生から2週間ほど経っ  
た、ある日。

大蔵省官舎にすむ鳴野家には、電話の逆探知はセットされて  
いない。なぜなら、警察は少女の遭難事故だとみているからだ。  
犯人から一本の電話が入った。昼間ならば、父親は出勤している。  
電話口にするのは母親だろう。

『鳴野佐和子の家だな』

どなたさまですか。

『娘は生きている』

えっ、ほんとうですか。ほんと

うに生きているんですね。

『うそをついて、どうする』

佐和子の声を聞かせてください

い。

『娘の命が大切なら、警察に知らせるな。新聞報道のまま、遭難  
事故にしておけ』

はい。娘はどこに居るのですか。

『まだ言えない。それより、娘の死亡届は出したのか』

いいえ。生きていると信じていますから。葬儀も出しています  
ん。佐和子を返してください。おねがいます。なんでもします  
から。



『娘は渡しやるが、永遠に警察やマスコミにおしえるな。それが身柄引渡し条件の一つだ』

永遠？ そういうことはできるのでしょうか。

『できる。十代のダメな家出娘を考えてみる。ロクでもない娘でも、わが子が2、3日帰ってこないとなると、親は心配で捜索願をだす。娘のほうは家出ごっこで、友だちの家に4泊、5泊したのちに、持ち金がつきて自宅に帰ってくる。親は娘の顔を見た途端に、ガミガミいう。しかし、警察には、わが子が無事だったと、電話の一本すらも入れない。そんな親は何千、何万人という警察に知らせないと、なにか罪が？』

『別に罪には問われない。警察が先ざきで生存を知ったところで、せいぜい常識がない親だと嫌味の一つ、二ついわれるていどだ。母親のあんたは雪山で幼い子から目を離れた、と新聞で批判されている。遭難騒ぎがあまりにも大きくなりすぎて、警察には言いづらかった、といえぼすり得ることだ』

わかりました。永遠に、警察にはいいません。

『娘の死亡届が出ていないとなると、7歳になれば、区役所から小学校の入学案内がくる。その先、なんら問題なく進級していく。何年か後、たとえば娘が小学3年生のころ、警察がなにか



の拍子に、少女の生存を知ったとする。そのときはこう言え。：娘がいなくなった日のこと、ピラタス蓼科ロープウェイの山頂駅で、パパとママがいなくなった、と泣く佐和子を見つけた女性がいました』

女性ですわね。

『そうだ。その女性は山頂駅で、いっしょに親を探してくれた。しかし、見当たらず、「ロープウェイで下りたのかしら」と山麓駅まで下った。そこでも探してみたが、両親は見当たらない。その女性は、佐和子から住所をきき、おなじ東京だからといい、車で大蔵省の官舎に送ってくれていた。このストーリーで語れ』

私たち夫婦は5日間、蓼科のスキー場において、ずっと娘を探していました。官舎は留守でした。

『孫の身を案じて、祖父母が官舎で待機していた、そのくらいの知恵ははたらかせ。祖父が女性に、お礼をしたいと言ったら、「結構です、結構です」といって、女性はすぐ帰っていった』

警察は、送り届けた女性の特徴を訊くかと思いましたが？

『歳月も経った、祖父母の記憶はうるおぼえだ。なにしろ玄関先で娘を受取ったのは、ものの数分だったから、といえぼすむ』  
警察はそれで引っこ返しますか？



『いいか。歳月が経つほどに、蓼科の警察署内は転勤、転勤で、少女の山岳遭難事故を憶おぼえている警官が少なくなっていく。日々に事件や事故は起きている。殺人事件だって起きる。警察は過去にいちど山岳遭難事故だと処理しゆりした、少女が生きていた。それだけで誘拐事件に切り替え、刑事をつぎ込み捜査したり、マスコミに発表したりしないものだ』

条件はなんですか。お金ですか？

『金をもらおうと、営利誘拐えいりりゆうかいだ。そうになると、事件としては大きい。何年後でも、警察は捜査に乗りだす。そんな危ない橋は渡らない。おれは完全犯罪ができる、優秀な能力の持主だ。それを成し遂げる、それが唯一の目的だ。

このさき警察に知らせず、おれの完全犯罪に協力する、それが娘を渡す条件だ。金は必要じゃない』

警察にはいつさい言いません。

『これだけは憶えておけ。もし、

この約束を破り、あんたが警察に

通報し、仮におれが捕つかまったとする。おれは一円も要求せず、

金はもらっていない。殺してもいない、娘のからだも穢けがしてない。

初犯しよはんだ。刑期けいきはそう長くない。5年、10年後には出所でき

る。そのときは、娘を殺す。いいか。鳴野佐和子、という名まえ

は世間にそうあるものじゃない。父親は大蔵省のキャリアだ。この条件から、おれはいつでも鳴野佐和子をさがしだせる。いや、



いつでも殺せるんだ』

約束は守ります。娘はいつ、どこで渡してくれるのですか？

『これから場所をいう、メモは取るな』

はい。

『八ヶ岳に本沢ロッジがある。日本では一、二番目に高いところに温泉がある場所だ。その山小屋にすれば、娘を渡してやる。ただし、ゼツタイにひとりで来い。警察を連れてくるようだと、先回りして、肉きり包丁で、娘の胸もとを刺してやる』

お願い、娘を殺さないでください。

『あんたしだいだ。いいか、一人で来るんだぞ』

私は雪山に登れません。夫でもよいですか。夫は大学時代、スキー部でしたから、山スキーもできます。雪山にも慣れていきますから。

『亭主でいい』

後生ですから、ぜつたい娘を殺さないでください。……母親は涙声で訴えていたと思われる。

井伊の右足が突如として、ブレ

ーキを踏んだ。ハンドルを右に切

った。のそつとした日本カモシカ

が国道に出てきたのだ。急ブレー

キ音で、カモシカは立ち止まり、

こちらをじつと見ている。



「危うく突き当たるところだった」

井伊は吐息を洩らした。対向車のトラックも止まった。井伊がクラクションをかるく鳴らすと、カモシカはゆっくり目のまえを横切っていく。路肩に渡っても、なおもこちらを見ている。

井伊の車がふたたび上り勾配の高原道路を進みはじめた。そのさきに『清里駅入口』の標識があった。

鳴野佐和子から連絡が入れば、彼女には両親とコンタクトを取ってもらい、身柄引渡しを中心とした一連の状況を聞きだしてもらう。かれはそう決めていた。

しかし、佐和子からはいちども電話がかかってこない。1日2回の定時連絡の約束を忘れたのか。いや、そんな杜撰な性格だとは思えない。蓼科は電波の状態が悪かったにちがいない。

井伊は佐和子の詩集から、『しるし』という題名を口ずさんだ。

わたしがうたった

歌のしるしが五線譜に

墓標のようにならんでいる

まつしろくお化粧されて

わたしはそれを数えながら泣く

〈まつしろくお化粧されて〉雪の本沢ロッジに閉じ込められた、5歳の少女は怖く悲しくて、泣きつづけていた。少女は自分を慰



めるためにウタを歌った。26歳になったいまも、心の五線譜ごせんぷには、悲しみの音符が〈墓標のようにならんで〉、残っているのだ。彼女はいまなお泣きながら、その歌を口ずさむ。

（こんなにも少女を痛めつけた、犯人はどんな奴だ）

井伊はまたしても犯人へのつよい憤りいきりを憶えた。

井伊の車が野辺山の最高地点を通過した。佐和子からの電話がまだない。

（身辺でなにか事件が起きたのだろうか？）

井伊の心には得体の知れない、不安が膨らふくんできた。こんな気持ちで運転すれば、交通事故を起すにちがいない。井伊は国道に沿った中華屋の駐車場に車を停めた。

（佐和子から池袋店に、伝言でも入っているかも？）

期待はできなかったが、井伊は運転席に座ったまま、ケイタイで店にかけてみた。あいては事務員ではなかった。

「あれ、レジチーフが事務所？ さて

は、そこで井戸端会議いどはなをしているのか？ 店長みせがいないのをいいことに」

「店長みせつたら、失礼な、真面目まじめに働いていますよ。4日間も休んでいる店長に、そんなことを言われるなんて、信じられない。だいいち井戸端会議は一人じゃできませんよ」

「すると、そこに事務員はいない？」



「はい。お母さんが急病で、病院に付き添うから、お休みですって」

「あの事務員のことだ、飼猫か、飼犬が急な腹痛だろう。動物病院に連れていくから、その世話でお休みします、店長には内緒よって？」

「さあ……、夏休みが明けたら、直接、本人に聞いてください」  
「わかった。さては、千鳥が淵の花見だな。先週だったかな、仕事ちゆうに、きよねんは武道館や千鳥が淵や三宅坂の桜が満開で、すばらしかった、今年も皇居や靖国神社に行きたいと喋っていた」

「だから、わたしからはなにも言えません。ところで、店長はいまどちらに……？」

「八ヶ岳だ」

「わかった。鳴野さんといっしょですよ。店長も隅におけませんね」

「下種のかんぐりだ。ひとりできていいよ」

「あら、そうかしら。旅先で、お互いに見失ったんじゃないですか。2時間ほどまえ、鳴野さんから店長さんに、「ご連絡したいので、ケイタイ番号をおしえてください」と連絡がありました。ちよつと慌てている感じでしたけど」  
「えっ、おれの番号はおしえたのに。ケイタイを失くしたのか



な？」

井伊は首を傾げた。

「書き取った手帳を失くしたといっていましたから、バックでも盗られたのかしら？」

「ケイタイも入っていたのかな」

「女のひとは旅先で買い物が好きでしょ。きつと買い物に夢中になっていたら、店長を見失った。キヨロキヨロ探していたら、注意力が散漫になって、引ったくりにも遭ったんじゃないですか」

(悪魔がでた)

佐和子はきつとそう思っているだろう。

「鳴野さんは都内にいる」

「本当ですか。疑わしい。あくまで、引ったくりはわたしの想像です。手帳だけ置忘れたのかも。店

長とはぐれて、気の毒だとは思いましたが、社員の電話番号はルールでおしえられませんが、とお断りしました」

「断った？ 鳴野さんといえは、店側の不注意で、事故を起して迷惑をかけた、お客さまだ。病院の支払いか、なにか書類上の話かもしれない。機転を利かせておしえてくれだっというだろう。チーフは事情をよく知っているはずだ。だが、今度かかってきた



ら……」

「嶋野さんなら、もうかかってきませんよ。はっきりお断りしましたから」

「冷たいんだな、キミは」

「それって、逆恨みじゃ、ありませんか」

「嶋野さんとの細い連絡網が切れてしまった……」

井伊は先ざきの不安を感じた。

「わたしの一言で、八ヶ岳が永久の別れになるのかしら」

「別のルートで、当たってみる」

「いいな。八ヶ岳高原で、ラブロマンスなんて。清里、野辺山の原生林をふたりして、腕組んで歩くんなんて、すてきだわあ」

「ほんとうに独りだ。信じてないな。好きに想像してろ」

井伊が電話を切りかけると、

「あつ、店長、ちよつと待ってください。鬼頭部長から伝言があります」

「夏休みでも、追いまわすのか。聞きたくない。せつかくの休みだ」

「店長会議レポートで、『つづき』とはなんだ、会社に来てやり直せ、と怒っていました。それに、ケイタイに電話しても出ないし、とカンカンでした」



「部長からまた電話があったら、夏休みが明けたら、『つづき』は書きます、次が楽しみでしょう、期待しておいてください、と伝言をたのむ」

「わたしの口から、そんなことはいえませんが。店長。レポートが『つづき』ばかりだと、鬼頭部長じゃなくても、だれでも怒りますよ。そういうことは井伊店長しかできないでしょうけど」

「キミも口うるさい女房役になってきたな。じゃあ、部長への伝言はたのんだぞ」

「あつ、店長、待つて。切らないで。別の伝言もあります。東中野店の店長があしたから二泊二日で、八ヶ岳の天狗岳に登られるそうですよ。できれば、井伊店長と本沢ロッジで、合流できないかな、と話していましたけど」

「本沢ロッジだった」

井伊の声が変わった。この場で、本沢ロッジが出てくる、何かあるのか、と身構えた。東中野店の店長の登山歴は長い。若いころ八ヶ岳連峰に登っている……。

「はい。たしかに、本沢ロッジとおっしゃっていました」

「おれと合流したいなら、なぜ直接、おれに電話をかけてこない？」

「東中野店長は最初に、井伊店長あてに、電話をかけてきたんですよ。井伊店長はきょうから4日間の夏休みです、と伝えたら、『そういえば、八ヶ岳に誘われたっけな。鬼頭部長はあしたから2日間出張だ、こつちも休みを取って、天狗岳にでも登ってみる

か。一週間も連続出勤だったし。あそこに本沢ロッジがあるから、井伊店長と合流して、飲みたいな。こっちがふたり分のアルコールを担ぎ上げてもいいから」という話になったんですよ」

セーフティーの店長は横のつながりで、たがいに電話をかけ、日々の売上や商品動向の情報を交わすのが常だ。ほとんどの店長は、だれか親しく本音を話せる仲間がいる。井伊にすれば、セーフティー登山部の東中野店の店長もそのひとりだった。「わかった。おれから電話を入れてみる」

かれは電話を切った。東中野店の店長よりも、まず鳴野佐和子のほうが優先だ。彼女の電話番号はどのように調べるべきか……？



104番で、都内の大手書店の電話番号を手当たりしだいに訊いた。3件ずつおしえてくれた。他方で、それらの番号にかけまくった。『書籍販売のデータ分析や解析をしている、鳴野さんをおねがいします』といつても、該当する人物はいないか、話が通らないか、どちらか。それでも、かれは粘りつよく電話をかけつづけていた。

7社目で、やっと佐和子の勤務先の書店が判明した。彼女は長期休暇ちゆうだった。セーフティー同様に、プライベート電話

はおしえてくれなかった。かれは粘りに粘ったが、ダメだった。この際はアメリカの大学の電話番号を調べて、大学教授の父親にかけあうべきか。娘の電話番号を訊いても、父親に警戒されるだけだろう。ムダな労力になる。

「鳴野佐和子の身が心配だ。ここはいちど東京にもどろう。悪魔が牙をむき出して、心優しい彼女に襲いかかっているのかもしれない」

かれは松原湖を通り過ぎた。そのさき佐久市内から上信越自動車道に入った。そして、関越自動車道の練馬にむかった。



### 【つづく】

写真モデル・森川詩子さん

詩集「受容」(旬本多企画・小林陽子さん(詩人)

地図(八ヶ岳)の作図・蒲池潤さん

写真提供(蓼科の雪山の風景)・高画質壁紙写真集無料壁紙の管理者から許諾済み <http://k-kabegami.com/>

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】

